

## ・・・ 定時制課程創設から閉課程までの歩み ・・・

## ◆定時制課程の歩み

昭和22年8月、文部省は定時制高等学校の設置を表明。翌23年全国92新制高等学校に通信制の課程を設置し、勤労青少年に教育の機会均等の場を与えた。

この制度によって、県下の殆どの高等学校では定時制課程を併設した。しかし、昭和30年を境に定時制進学者は減少の一途を辿ることになった。そして、戦後経済成長による生活の安定から教育への関心も高まり、施設設備の充実した全日制への希望者が増加し始めた。

本校はこのような状況下で、35年度定時制課程開設の認可を得た。地元産業発展の原動力は勤労青少年に期待するところが大きい。それなのに上越の商業・経済の中心地に商業課程の定時制の無いことは不自然である。これはまさにそうした実情を踏まえ、新設したいと念願し努力した第8代近藤正浩校長の積極的な交渉の賜であるといえる。

こうして、昭和35年4月1日開設の運びとなるのであるが、2ヶ月間に教育課程や教育方針を策定し、生徒募集を行わなければならない、当面の事務処理を松尾主事(当時)が担当することになった。

そして、当面の大仕事は生徒募集であった。高田市内は勿論、東頸、中頸、西頸の農村地帯も歩き回ったが、近藤校長が豪語した2学級編成は可能どころか、2次募集までしたが34名が入学したに過ぎなかった。

開設1・2年時は比較的人数も少なく、教師と生徒は不備な環境の中、お互いに枠を超えた人間的な触れ合いがそこかしこに感じられた。中には転職の相談に応じて欲しいという生徒もいたが原則として関わり合わず、むしろ定着性を指導し、雇用主との連絡を強化して解決していく方針で臨んだ。卒業生の大部分は主に第二次産業に4年間継続して勤務し、95%が地元にとどまり、特に第二次産業の中堅として地元産業発展に大きな貢献を果たしている。

## ◆独立高校誕生と閉課程式

昭和39年4月より定時制補習教室が開設されることになった。定時制高校にとって、生徒数の減少は統廃合の対象となり、勤労青少年の学習の場が狭められる結果にもなる。現在の夜間定時制のシステムでは向上心に燃えながらも勤務条件によって通学を断念している青少年が多くいるはずである。

これからは2部制もしくは3部制を実施することによって教育の場を与え、なおかつ生徒数の増加によって統廃合を免れ、むしろ新しい定時制の在り方としてその存在価値をアピールできるのではないかという見方もできた。

市内大手企業である有沢製作所は中卒の社員を多数抱え、勤務形態が定時制通学を断念せざるを得ない状況を打開して中卒者の安定確保をはかる必要に迫られていた。

従って、昭和38年9月3日、有沢製作所と2部制授業実施について検討し決定した。その背景には、一方は社員、一方は生徒の安定確保の問題があった。そして昭和39年4月に開始されたが、補

習教室の運営は教師の善意と有沢製作所からの経済的援助のもとに始められたため、正規の制度として認められず、様々な問題を抱えていた。

生徒急増期にある全日制に教室の余裕はなく、補習教室には図書館の第2閲覧室が当てられたが、普通教室の4分の1の広さであり、劣悪な環境での出発となった。41年には3学級に増え、教室の確保も困難になり、学校当局・高田市当局・県教育庁学事課・指導係・有沢製作所の当事者が準備会を重ね、漸く高田市勤労青少年教育促進会を設立し、育成を図ることになった。しかし、全日制は学級数増加で施設設備は狭隘となり、全定同時に体育館・グラウンド・特別教室を使用することは困難な状況にあった。公認されていない補習教室のために全日制的教育効果の低下をきたすことは避けなければならなかった。

この2つの問題解決として考えられたのは、全日制的の移転と跡地に独立定時制高校を設置する案であった。

こうして、昭和43年1月1日に県立南城高校が独立校として誕生した。それに伴って商業高校定時制は42年度の入学生が最後の学年となった。

昭和46年3月10日、第8回生36名の卒業式終了後、高田商業高校定時制閉課程式が関係者多数見守る中で行われた。

